

第2言語における語彙習得について

奥田 祥子

Second language vocabulary acquisition by a Japanese child

Okuda, Sachiko

I. はじめに

かなりの数の研究が幼児を含む子供の言語習得について行われてはいるものの第2言語における語彙習得に焦点を当て、その発達を取り上げ論究した研究はほとんどないといってもよい。特に長期間に渡って幼児の語彙習得を扱った研究はほんの少数にとどまる。その中でトルコ人の子供によるオランダ語の習得を研究した van Helvert (1982) や、ドイツ人の子供4人による語彙習得を扱った Wode et. al (1992) 等の研究がよく知られている。一方、日本語を母語 (L1) とする幼児の語彙習得については Yoshida (1978) の男児の研究、本研究と同じ被験者を対象に滞米約3ヶ月間 (正確には11週間) の習得を追った Rescorla & Okuda (1987)、それ以降の語彙習得を扱った奥田 (1985, 1986, 1988, 1989, 1990) の研究等がある。

Ellis は Clearly, it is not possible to say much about developmental patterns in L2 vocabulary acquisition. The research to date, however, suggests that such patterns may exist (Ellis, 1994: 113) と述べているが、本論文では日本語を第1言語 (L1) とし、英語を習得対象言語 (L2) とする幼児の英語語彙発達のパターンを調べる。そのために以下のリサーチ・クエッション (RQ) を設定し、アメリカ滞在6ヶ月間に収集したデータをもとに Yoshida の研究を参考にしながら語彙習得について論じる。

R.Q: 1) 英語で表現できない時、幼児はどのような方略を使用して意思伝達を図るか。特に語彙習得を促進するための方略はあるか。

2) 意味範囲により習得の早遅はあるか。もしあるとするとどの意味範囲の語彙が早く習得されるか。L1習得との相違はあるか。

3) データ源による相違はあるか、習得のパターンは同じか。

調査の対象となった日本人女児Aは5歳2ヶ月で母親とアメリカに行き、1年間滞在した。最初の3ヶ月ほど保育園に通い、それから小学校へと進学した。小学校に入学の前1ヶ月ほどは夏休

みで訪れた父親と従兄との生活があり、英語の環境から少し離れたともいえる。しかし断続的にはアメリカ人との交流はあった。

II. 先行研究

従来、第2言語習得研究は文法を中心に行われ、子供のみならず成人を対象とした語彙の習得研究に研究者の関心が寄せられていなかった (Ellis, 1994 : 110)。Rescorla & Okuda (1984 : 690)によると Hakuta (1974) や van Helvert (1982) を始めいくつかの研究はあるものの

Unfortunately, most of the studies which report any lexical data have not had vocabulary acquisition as a primary focus of the research, resulting in data which are sketchy and incomplete.

と十分には行われていない。日本人幼児の語彙習得に関しても上述したようにいままでのところ Yoshida, Rescorla & Okuda, 奥田以外に研究が十分行われているとは言い難い。Yoshida の研究 (1978 : 91-100)

では被験者は3歳3ヶ月でアメリカにきた日本人男児で3才5ヶ月目からデータ採取が行われた。データ収集は滞米2ヶ月過ぎからはじめられたことになる。この点でアメリカ滞在初日からデータ収集が行われたA児とは異なる。このように第2言語環境におけるごく初期のデータを扱った研究はさらに少ないとはいえるが、データ収集の時間的な違いが習得に影響を及ぼすかどうかについては研究がなく、本論文でも論議しない。Yoshida の被験者の男児は7ヶ月間英語にさらされた結果 (最初の2ヶ月を入れると9ヶ月)、文法的な範疇として普通名詞が60.6%、動詞が13.0%、形容詞や副詞など10.0%を習得する。名詞の習得が動詞より多く L1 習得者の referential 型の子供と同じ傾向を示している (Rescorla & Okuda, 1987 : 692)。A 児の場合は名詞が56.2%、形容詞・副詞が15.9%、動詞が12.8%とほぼ同じ割合を示している^(注1)。Yoshida のデータ源は奥田の AS (Adult Session) と D (Diary) からなるデータに該当する^(注2)。したがって収集時期のずれを考慮に入れても両者のデータを比較することによって幼児の第2言語習得について明らかになることがあろう。

Ellis (1994 : 112) は語彙習得研究には長期間にわたる調査が必要であると主張し、今までの研究ではそれに該当するのは Yoshida (1978) と Wode et al. (1992) の2つの研究しかないと述べている。Wode et al. の研究では以下のように L1 と L2 の語彙習得について3つの相違をあげている。(Ellis, 1994 : 113)

- 1) 最初の50語までは L2 学習者のほうが L1 の幼児より習得が早い、次第に L1 の幼児のほうが L2 学習者より語彙習得の速度が早くなる。
- 2) 般用は L1 習得者においてはよく見られるが、L2 習得者ではほとんどない。
- 3) 前置詞、冠詞、代名詞のような closed-class items は L1 の子供たちでは習得は遅いが、L2 の子供では早くから高い確率で現れる。

以上の3点に関しては Rescorla & Okuda の研究でも同様な結果を示している。Rescorla & Okuda では A 児が滞米11週間の間に習得した75語と英語を L1 とする子供の習得した75語を比較し L1 と L2 の習得のける違いを述べている。

Ⅲ. ディスカッション

a) リサーチ・クエッション 1 に関しては子供なりに自分の言いたいことを表現するために、工夫を凝らし語彙の不足を補う方略を使用することがあげられる。また目標言語にはない新しい語彙を作る。たとえば A は色が消えてしまったことを, “Because this is come-off magic.” と言い表した。また L1 と結び付けて “水色 one” というように自分の知らない目標言語の語彙に L1 を使用し, それに L2 の語彙をつけて言語を混同 (language mixing) して使用した。この方略はほかの幼児にもかなりの頻度で現れる。

語彙習得方略の特徴として、滞米初期には特に 1 ヶ月目で模倣やジェスチャーを使用して意思疎通を図る。そして後半になると目標言語の音を正確に捉え始めるが意味との mapping がまだできていない。滞米 2 ヶ月目以降は相手から情報をうる為に (Oh) look や, Look at this (that) を頻発して相手の注意を引き, 自分の言えない語や表現を代わりに言ってもらい英語力不足を補おうとする。たとえば,

A: Oh, look. (自分と同じようにギブスをはめている人の絵を見せて)

L: Someone has a cast, like you.

この対話に見られるように相手の言語能力を利用して自分の言いたいことを示すのである。

第 5 回目の AS ではこのようにして 1 時間に実に 200 回以上も Oh, look を発する。これはほかの子供にも見られる方略である。たとえば Huang の被験者 Paul (Hatch, 1978: 407) がそのひとつの例である。

Paul: Oh-oh!

J: What?

Paul: This (points at an ant)

J: It's an ant.

Paul: Ant.

複数の形態素を使用する代わりに Yoshida の被験者は “all”, “and” を使用する。たとえば, This is house and house and …… (repeated 11 times) (Yoshida: 95) この方略は A 児にも使用され, This is flower and flower…all flower (AS9: 7/24) と複数形の代わりに語彙を列挙してその概念を表わした。And の活用により, 文を際限もなく長くすることが可能になり, 色彩用語および名詞を列挙して, 単純な重文を多数発話することも学習方略としてみられる。

Yoshida の研究で被験者は While he did learn a number of English verbs and used them in Japanese sentences, his early utterances show an /iz/ form in the verb “slot”. The /iz/ may have been the English copula or it may merely have been a filler sound which appeared in verb position. (1978: 100)。同じ L1 をもつ A 児にもこの /iz/ の使用がみられる。しかし奥田の研究では /iz/ は filler としての性格を持っているとも考えられるが, むしろ規則性を持った 3 人称現在の goes の

ような-es 又は所有格の 's として使用されたとみなされる。したがって A 児の中間言語の一端を示していると考えられる。たとえば, This go is here.' などの go is はある期間, 規則的に使用された。これは L1 である日本語の構造の影響もあるであろう。音を正確に掴むが (Clark の言う form) その意味が分からず母に聞いたり, その状況で当てはまると思われる意味を推量したりする方略も使用される。Clark の言う意味と形の mapping が行われるのである。

A 児の語彙の習得がどのような方法で行われたかその傾向を明確にするため, 滞米 6 ヶ月内における習得語彙を 3 習得方法によって分類した。下記の表 1 において, 1 語で現われ習得されたと思えることのできる語彙を A に, chunk として使用された語彙を B に, 構文の中でのみ使用され習得された語彙を C に分類した。なお D として初出と習得の状態が異なる混合型, すなわち習得時は 1 語で用いられ A に分類されるものの, 初出は C の形で現われた語彙とその反対に初出が A の状態, 習得は C の状態で現われた語彙を区分した。

表 1 滞米時間と語彙習得方法^(注 3)

習得方法 滞米月	A	B	C	D
1 ヶ月日	79.2	20.8		
2 ヶ月日	53.5	10.7	12.0	24.0
3 ヶ月日	44.6	10.7	25.6	19.0
4 ヶ月日	35.4	7.8	38.8	18.1
5 ヶ月日	24.5	12.2	34.7	28.6
6 ヶ月日	25.5	8.0	44.5	22.0

上表から概括的に A の比率が滞米時間の経過と共に減少すること, C の比率が反対に増加することが判明する。後者の増加は滞米時間の経過と共に統辞規則が習得され, 発話文も長文となってくる傾向を示すものと考えられる。この表はまた, 滞米 4 ヶ月目に入って習得方法上変化が現われたことを明確に示している。時間の経過と共に分析的方法による語彙習得の割合が増加したことは文習得方法の場合と同様である^(注 4)。

b) リサーチ・クエッション 2 に関して (Clark, 1993 : 28, 30, 31, 42 を参照のこと) Semantic categories として Yoshida は food and drinks 20.9%, vehicles including ships and airplanes 10.8%, wild animals, 8.2% をあげている。これを A 児の滞米初日から 6 ヶ月にわたるデータと比較すると, かなりの違いが見られる。語彙の意味範囲は, ……the contents of his vocabulary showed his world—his interests and preference, and his more advanced recognition and perception of objects. (Yoshida, 97) とその子供の興味を示しているといわれている。これを A 児の AS データと比較すると, food and drinks 7.2%, animals 4.0% となる^(注 5)。Vehicles including ships and airplanes

にいたってはほとんど習得がなされていない。また下記の表 2 で見るように D でも food and drinks 6.8%, animals 4.3%, vehicles including ships and airplanes は 1 % となり, Yoshida の被験者との違いが大きい。A 児の主な意味範囲の語は色彩語を含む形容詞や副詞 (AS では 15.8%, D では 14.7%), また感情を表す語彙である。このように子供によって語彙習得のパターンは異なるといえる。A 児の D で発話された語彙の意味範囲を見てみよう。表 2 によって滞在期間が長くなるに従い, 習得語彙の意味範囲が多岐に渡ることがわかる。

表 2 D で発話された語彙の意味範囲^(注 6)

		PN	P	A	F	C	L	N	O	P/L	AC	ABS
1 ヶ月	語数	4	1	1	2		10	1	1	1		
	%	10.8	2.7	2.7	5.4		27	2.7	2.7	2.7		
2 ヶ月	語数	8	2		8	4	1	5	12	4	7	
	%	8.3	2.1		8.3	4.1	1.	5.2	12.4	4.1	7.2	
3 ヶ月	語数	15	11	6	12	3	6	2	11	3	5	3
	%	11.5	8.5	4.6	9.2	2.3	4.6	1.5	8.4	2.3	3.8	2.3
4 ヶ月	語数	13	2	10	9	4	6	3	8	9	5	2
	%	8.3	1.3	6.4	5.8	2.6	3.8	1.9	5.1	5.8	3.2	1.3
5 ヶ月	語数	7	7	6	4	4	2	2	5	3	4	1
	%	9.2	9.2	7.9	5.4	5.4	2.6	2.6	6.6	3.9	5.4	1.3
6 ヶ月	語数	10	6	3	6	3	3	5	14	2	1	18
	%	9	5.4	2.7	5.4	2.7	2.7	4.5	12.6	1.8	0.9	16.2

M	V	I	PR	AUX	C/P	
4	3	9				37
10.8	8.1	24.3				99.9
14	18	5	9			97
14.4	18.6	5.2	9.3			100.2
15	15	8	4	10	2	131
11.5	11.5	6.1	3.1	7.6	1.5	100
35	25	8	6	4	7	156
22.4	16	5.1	3.8	2.6	4.5	100
9	14	2	1	3	2	76
11.8	18.4	2.6	1.3	3.9	2.6	100.1
12	17	2	2	1	5	110
11.7	15.3	1.8	1.8	0.9	4.5	99.9

It seems intuitively reasonable that an older child learning a second language will acquire vocabulary more rapidly than a young first-language learner, because the older child already has a fully developed conceptual system in his/her native language, as well as more developed memory skills. (Rescorla & Okuda, 1984 : 691)

L1とは異なり、L2ではコミュニケーションを行うことのプレッシャーが大きい。それが記憶力の強さとあいまって formulaic speech を促すものとなる。しかも L1 習得者と違い認知能力が高いため、いわゆる般用 (overgeneralization) などの間違いが少なくなっている。

上述したように L1 と L2 習得に関して大きく 3 つの相違があるとされる。その違いについて A 児の場合、Rescola & Okuda では、

……, Atsuko's data indicate a different pattern of lexical acquisition from that typically found in first-language learners. First, Atsuko's lexical acquisition proceeded much more rapidly. Secondly, nominals were much less prominent and verbs, pronouns and modifiers were much more numerous in Atsuko's lexicon than they usually are in first-language vocabularies. While Atsuko's general nominal percentage is similar to that of L1 expressive children, her productive use of verbs and pronouns and her acquisition of modifiers are not typical of early L1 acquisition. Finally, overextensions and overinclusive categorizing were much less frequent and persistent than in first-language vocabularies. (694 – 695) (注 7)

と述べ、こうした違いをもたらした要因は認知能力と L1 と L2 習得者の背景にある知識の違いによるものであると説明する。しかしながら Yoshida は他の研究者の例をひいて L2 のほうが L1 よりも動詞の語尾変化の習得が遅かったと記述している。(Yoshida, 97)

c) リサーチ・クエッション 3 に関して A 児 の AS と D の違いを見る。AS は大学の研究室というほぼ一定した環境で大人が主導権をとり抽出的な方法でデータが採集された。一方 D は日常生活のさまざまな状況で自然に発話された語彙を筆者が記録したものである。以下習得語彙数と名詞と非名詞という大きく 2 分された文法的要素による違いを見る。

表 3 A 児の語彙習得数 (注 8)

時間	AS の語彙	D の語彙
1 ヶ月	46 (24)	37
2 ヶ月	105 (75)	97
3 ヶ月	138 (117)	131
4 ヶ月	104 (116)	156
5 ヶ月	52 (48)	76
6 ヶ月	140 (200)	110
計	580 (556)	607

表4 A児の名詞と非名詞の習得割合

Dのデータ			ASのデータ	
時間	名 詞	非名詞	名 詞	非名詞
1ヶ月目	21 (56.7)	16 (43.2)	24 (52.2)	22 (47.8)
2ヶ月目	51 (52.7)	46 (47.5)	63 (60)	42 (40)
3ヶ月目	77 (58.8)	45 (41.2)	71 (53.4)	62 (46.6)
4ヶ月目	71 (45.5)	85 (54.5)	54 (49)	53 (51)
5ヶ月目	45 (59.2)	31 (40.8)	29 (55.8)	23 (44.2)
6ヶ月目	71 (64.5)	39 (35.5)	88 (62.9)	52 (37.1)

滞米5ヶ月目に見られる言語活動の極端な後退は、言語活動が時間の経過と共に順調な上昇線を描くのではなく、子供の環境や他の条件に支配される社会的産物であることを裏付けている。5ヶ月目の習得語の減少は父親と従兄の訪米、旅行など小学校入学前の期間に環境の変化があり、日本語の使用機会が多かったことにもよるであろう。アメリカ人家族との交流も断続的にはあったものの日常生活ではもっぱら日本語が使用された。この語彙習得の低迷時期はどのように解釈できるであろうか。この時期、語彙習得より文構造の習得に力が注がれ習得力のバランスの力学上、前者の力が弱まったと解釈できるであろうか。実際に、この低迷時期の滞米5ヶ月目にはthere's, I like型の構文が頻用され、文構造的に見ると、決して停滞時期であったとはいえない。

以上のデータを比較して、DとASに大きな相違が見られるであろうか。表3と4を見る限りでは、語彙習得上大きな違いはないといえる。これはA児の生活範囲の狭いことが、一因となり多様な英語に接触する機会が少なかったことによるのかもしれない。それは小学校入学後（滞米6ヶ月）、生活環境の広がりとともに語彙の習得が急速に伸びたことから推察できる。また学校用語としてyou mayの使用や、外国人に対する英語教育 English as a Second Language (ESL) のクラスでの授業で教えられた語彙が習得されていることを考えると、教育の効果が大きな影響を語彙習得に及ぼすともいえる。したがって生活範囲の広がり、同世代の子供達との交流が語彙習得の促進に関係が深いといえる。それはまたインプットが多量に与えられるからであるともいえる。ただ形と意味のmappingがうまくいかない場合も多く、教師の使用する 'You may sit down.'などを真似て言っても、おそらく意味がよくわかっていないと思われる。状況の中で意味を類推することはできても、正確な意味の掴み方ができていないことになる。それはwonderfulと発話して意味を聞かれると 'おいしい' という意味だと答えたことから分かる。

IV. 結論

以上で述べてきたようにL1を共通とする第2言語学習者間において語彙習得パターンの相違はそれほど小さくなく、普遍性が見られるといえる。しかしYoshidaの厳密なデータがないので、

明確な結論は出せない。Yoshida と Rescorla & Okuda とでは分析方法上の違いもあり、両者の単純な比較は習得の研究としては問題があろう。もう少し分析対象となる子供のデータを多く集めて研究をしないと、普遍的な習得現象を見つけることはできないといえる。しかしながら本論文で Ellis のいう語彙習得パターンについて多少でも明らかになったことと思う。

注

1. しかしながら奥田の名詞には固有名詞を含んでいるが、Yoshida は普通名詞のみ対象としていたので、実際の割合は異なってくる。A 児のほうが普通名詞の習得は少なく L1 の Expressive 型に近くなっている。
2. データ源として AS はアメリカ人の L1 の研究者とのセッションで、テープに録音され、筆者がそれを普通の文字に書き起こした。D は母親である筆者が A 児の日常の発話をできるだけ記録したものである。
3. 表 1 および説明は奥田祥子“語彙習得過程について”(1986: 昭和61年)から転用したものである。
4. 奥田祥子“言語習得方法—文型を中心に” (1985) を参照。この研究での使用データは限られた一部のもので本論文のデータとはその対象範囲が異なる。しかしながら、ある文型が初出してから多用されるまで時間的経過が必要であることから、文構文および他の文法規則の習得時には語彙習得数が減少する可能性はありうると仮定できる。
5. AS のデータに関しては奥田祥子“語彙習得過程について”(1986: 昭和61年)を参考にした。
6. この意味範囲の分類は Rescorla (1980) の L1 研究で使用されたものに従っている。A 児を対象とした研究はすべてこの分類基準に従っている。
7. 固有名詞を除くと A 児の習得パターンは Expressive 型に近くなるので、この指摘で間違いがないが、固有名詞を入れると Yoshida の被験者と同じように Referential 型となる。
8. AS のデータは奥田祥子 (1986: 昭和61年) から転用した。括弧の中の数字は習得されたとみなされる語数である。

参考書目

- Clark, E. (1993). *The lexicon in acquisition*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Hatch, E. (ed.) (1978a). *Second Language Acquisition: A Book of Readings*. Rowley, Mass.: Newbury House
- (1978b). Discourse analysis and second language acquisition. In Hatch. (ed.), (1978a), 401–435

- Meisel, J.M. (1994). Code-switching in young bilingual children: The acquisition of grammatical constraints. *SSLA*, 16, 413–439.
- 奥田祥子 (1985: 昭和60年) 「言語習得研究－文型を中心として」『語学教育研究論叢』
Vol. 2, 37～58.
- (1986: 昭和61年) 「語彙習得過程について」『大東文化大学紀要』第24号, 319–330.
- (1988: 昭和63年) 「滞米7ヶ月目の語彙特徴」『語学教育研究論叢』Vol. 5, 33–45.
- (1989: 平成1年) 「滞米第三4半期の使用語彙特徴」『大東文化大学紀要』
第27号, 405–420.
- (1990: 平成2年) 「滞米第4期目の語彙特徴」『大東文化大学紀要』第28号, 161–174.
- Rescorla, L. (1980). Overextension in early language development. *Journal of Child Language*.
Vol. 7, 321–35.
- Rescorla, L. & Okuda, S. (1984). Lexical development in second language: Initial stages in a Japanese child's learning of English. *Journal of Child Language*, Vol. 11, No.3, 689–695.
- Yoshida, Y & E. Hatch (1978). The Acquisition of English vocabulary by a Japanese-speaking child in second language acquisition. In Hatch (ed.), (1978a), 91–100.